

富士紀行(79) かかる教官ありき（教官讃歌）第二弾（H13/7/9 記）

前回（77号）では、機甲科部の訓練教官を紹介したが、今回は特科部の教官を取り上げた。戦術教官、訓練教官と違ってやや地味な存在ではあるが、非常に重要な職責を有している武器教官を取り上げた。自らが装備する火器をもの見事に駆使しうる能力を具備することは自衛官の基本的条件である。また、幹部は、装備火器に関し部下を十分に指導しうる能力を有するべきである。こういう意味において地味ではあるが火器教官の役割は重要である。

今回取り上げるM3佐（前はM2佐で今回も奇しくも同じイニシャル）は平成10年3月特科部教育課武器班に配置されて以来、上級陸曹特技課程「野戦砲整備」の課程主任を2回務めたほか、幹部特修課程等の火砲関連教育を担当してきた。

① 火砲教官としての信条（M3佐の言）

火砲の専門家となれるよう、愚直ながらも心を込めて職務に当たっている。特に「後方支援体制の変換」という時代の流れの中にあって、使用者としての整備に関する識能低下を懸念し各種施策を検討しているが、小学校以来の熱狂的なファンである阪神タイガースのように（監督が施策を講じていても実際は実を結んでいないという意味）結果が表れていないという現状である。（と本人は謙遜している。）

② 深夜に及ぶ補備教育

特科部隊の命は射撃精度にあり、精度は火砲の整備に負うところ極めて大である。戦砲隊の整備責任者が戦砲隊陸曹であり、その陸曹を養成するのが上級陸曹特技課程「野戦砲整備」課程である。この課程の重要性は斯様であるから、教官の要求レベルは相当に高い。中には、科目によってではあるが、落ちこぼれや理解不足で所望の練度に到達しない者もいる。彼は、該学生に翌朝までのレポート提出を命じるのである。M3佐の凄いところはここからだ。2200か2300頃になると教場に出かけて行って、かの学生の作業状況を確認し、状況によっては、手取り足取り深夜1時又2時まで彼が理解納得できるまで付き合うのである。出来ない者、理解不十分な者を切り捨てる者が多い中、なかなか出来ないことである。

③ 学校教官として全国に積極的に情報発信

富士駐屯地修親会は「富士」と称する修養誌を発刊して、全国の同好の士に所要の情報を提供・発信している。公務の傍ら余分な仕事をするというのは骨が折れるものだ。彼M3佐は着任以来、自分の職務に関連する事項のうち全国の特科部隊の幹部や陸曹が承知しておくべきだと信ずる事項を積極的に投稿しており、優秀記事として表彰もされ

ている。

小生など2年半の勤務で一回も投稿したことがないのに比すと雲泥の差だ。

④ 問題意識を持った勤務と具申：真のプロ

今般の陸上自衛隊の後方支援体制の変換に伴い、特科部が担任している、野戦砲整備課程等が廃止されることになるが、このことは今まで以上に幹部等が、火砲等の整備に関する識能を必要とすることでもある。「私、使う人、あなた、整備する人」という単純な役割分担ではない。又、彼が色々と分析して初めて解った如くに、使用者整備もより重要になってくるはずである。一般課程における整備に関する教育をどうするか等の問題点の発見と検討も、彼なくしてはあり得ない。

⑤ 業務の積極的改善等

3年余りで、10件の業務改善提案を実施している。唯、漫然と勤務していたのでは、何を改善すべきかなど解ろう筈がない。又、装備品の不具合等に関してもユーザーの立場から、かくあるべきであるとか、ここをこのように改善すべきである等の装備改善提案を積極的に行っている。

⑥ マルチ教官

彼は火砲教官であるが、単なる火砲教官ではない。マルチ教官でもある。戦術班や訓練砲術班の訓練に引っ張りだこであることが彼のマルチ教官ぶりを証明している。

実射訓練におけるFO指導官（学生に対して十分な指導のレベルを持っている教官は専門の教官以外には意外に少ない（特科の諸官に怒られるかな？））、射撃中隊訓練における戦砲隊指導官と言うような特科のいわゆる正面の訓練指導は勿論、各種MM等の兵站等幕僚に対する指導官をも出来る本当のマルチ教官であり、教育課長等は重宝しているようだ。なかなか出来ることではない。

彼は、特科部教育課武器班武器教官（火砲教官）の宮本芳昌3等陸佐である。因みに、特科部長もまた熱狂的な阪神ファンであり、部長の「阪神の強い時代は、職人の揃った時代である」との言を借りれば、特科職種も宮本3佐のような多くの職人教官の感化を受けて、全国各地に職人（プロ）が育つだろう。